

「法友」の恋：宇治十帖の目論み

天野，紀代子 / AMANO, Kiyoko

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

83

(開始ページ / Start Page)

24

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010205>

〈論文〉

「法友」の恋

— 宇治十帖の目論み —

光源氏の死後もなお筆を擱かなかった作者は、この先何を書こうというのか。宇治十帖で企てられたテーマを、どこに見定めたらいいのか。光源氏の子や孫の世代に展開する、これまでとは趣を異にする物語の核心を捉まえたいというのが、本稿の目指すところである。主人公を薫と定めて出発する物語は、宇治に隠棲する親王と「法の友」の関係を結び、その長女との「世の常ならぬ」恋物語を展開する。結局、彼女を死に至らせるしかなかった物語は、その後、女性たちの側により重心をかけて、宇治から都へ、更に小野へと辿ってから、終幕は下ろされることになる。

『源氏物語』は宇治十帖あつてこそ高い到達を持ったと思われるが、人間の心の奥深くまでを対象とし、葛藤や矛盾をも解き明かしていく表現世界は、どのような設定あつてこそ可能だったのか。そして、そこで明らかにされるものとは何か。ここでは、宇治の物語の始めの巻々「橋姫」「椎本」「総角」に目

天 野 紀 代 子

論まれた意図を読みとり、この物語の切り拓いた境地を探ってみたいと思う。

一、不遇の親王の隠棲する宇治

そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。(五
— 117 ※)

「橋姫」巻冒頭のこの一行からは、それまでの雰囲気とはがらりと違う空気が伝わってくる。光源氏の栄華の陰に隠れて、世間からは忘れられている老親王がいるという。「古宮」は、『源氏物語』ではここ以外すべて「宮の旧邸」の意味で使われてきたが、ここだけ例外的に古い親王の意味で登場させている。「古親王」なら、『宇津保物語』に上野の宮という老親王がいた（「藤原の君」。あて宮の懸想人の一人だが、風流に無縁の偏屈な年寄りで、どうもこの老親王は参考にされてはいないようだ。宇

治十帖では、世間から疎外され過去の人とされた親王が「古宮」と称して前面に据えられる。どうして政治権勢の圏外に放逐され、都を去らねばならなかったのか。

彼は光源氏の弟の第八皇子だったが、両親に早く死なれ取りたてた後、見もなかったので、敵対する弘徽殿太后側にかつがれて政争に巻き込まれ、敗れた過去があったというのだ。反光源氏の烙印は、その後の人生を生きづらくした。せめて北の方と睦まじく暮すことだけを慰めとしていたのに、二人の娘を残して死なれてしまう。おまけに住んでいた邸が炎上し、京に住むべき家もなかったので宇治に移ったという経緯が、矢継ぎばやに説き明かされる。作者は光源氏裏面史に、第八宮の悲運の半生を捻りだし、これからの物語に重要な役割を与えるのだ。では、どうして親王の落ちのびていった先が宇治なのか。

宇治といふ所によしある山里持たまへりけるに渡りたまふ。
(五—125)

宇治は、親王が別荘を営むような山紫水明の地でありつつ、世を憂しと逃れ住む里というイメージも持っていた。隠棲的な性格は、喜撰法師の歌「わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうち山と人はいふなり」(古今和歌集982)に負うところが大きい。と同時に、南都や長谷寺参詣への中宿りとなる遊興の地でもあったことが、往來の都人との接点を生じさせた。京に住みわびた親王の落着き先が宇治とされたことが、この物語にとって重要となる。

一条兼良による注釈『花鳥余情』(十五世紀)は、八宮を応神記にある菟道稚郎子に準えている。兄の仁徳天皇と天下を譲

り合ったという「うち」の名を持つ弟である。高橋亨氏は、さらに宇治川で水死した長兄の大山守のことを加えるべきだと述べている。宇治川には、遙か古代に皇位継承をめぐる哀しい伝承があったことは、心に留めておいていい。しかしそれはモデル論としてではなく、記紀歌謡に「宇治の渡し」と謳われた宇治川の激流を想定する意味においてである。宇治十帖には、「浮舟」巻まで一貫して宇治川の激しい音が流れている。宇治は閑静な地であるより、耳かしがましい川音に代表される地として、物語の中心に据えられた。

親王の隠棲地として当時の人々がまず思い浮かべたのは、惟喬親王の小野であろう。文徳天皇の第一皇子でありながら藤原氏によって排除され、不遇の生涯を小野に送っていたことは、『伊勢物語』の描くところだ。在原業平は、雪を踏みわけて親王を訪ねることになろうとは誰が思っただろうか、と哀切な歌で慰めている(八十三段)。宇治十帖は最後に、この小野を浮舟を受け止める地とするが、最初は、貴族たちの行き交う宇治の地を、薫を受け入れる舞台とする。先走って薫を口にしたが、「橋姫」巻冒頭は薫や匂宮にはいっさい触れず、没落の親王八宮の不運な半生に紙幅が費やされている。この八宮の消息が、法の師である「聖だちたる阿闍梨」によって京にもたらされる。聖のようなといえば教団から離れて宇治山に籠る修行僧のイメージだが、阿闍梨というのであるから朝廷から任じられた官僧であり、そのことが京の冷泉院に、そして薫に繋がる道を作っている。

宇治の八宮の情報が初めて京にもたらされるという所で、宇

治十帖に先行する「匂宮」三帖に触れておかないわけにはいかない。「匂宮」巻には、光源氏の後継者と言えるのは匂宮と薫の二人ぐらいたと提示され、「橋姫」巻はそれを前提としているからだ。「匂宮」巻は巻名からしても、源氏の孫である匂宮の方が少し前面に押し出されていて、主人公はまだどちらとも決めずに出発している観がある。ただ薫が、出生の秘密を感じて苦悩し、出家を志向する少年として描かれていることが印象深い。父母の事情を誰も教えてはくれないが、尼姿の若い母の後生だけでも安らかにしたいし、亡くなっているという実父には来世に生れ変わってでも会いたい。早く出家したいのはそうした理由による。

元服はものうがりたまひけれど、すまひはてず(五―24)

薫は、結婚など社会に組み込まれることになる元服は気がすすまないと言うのだ。まだ少年期の人間が元服を拒否するとは驚くべきことだ、と益田勝実は二人の「隠君子」の例をあげて天皇の皇子が白髪になるまで童形のままで生きたという、自己否定の「心の極北」を論じている。小学館新全集本五巻の「付録」には、この論文を紹介して「薫の離俗の姿勢のうちに、隠君子伝承の存在を想像すべきか」(五―514)とあるが、作者の発想源にそれを求めるのは当たらないだろう。通過儀礼を拒否するなど容易ならぬこととする歴史認識が作者にはあり、その上で、極端な志向を持つ少年像が創られたと理解するに留めるべきだ。益田論文は、「薫の厭世観を色濃く描き出そうとするあまり」の造形と見ているのであり、平安文学には一人として成人礼を拒否しぬいた人物は見出だせない、薫もまたその一人

に違いないと説くのである。

少年薫の元服拒否は結婚拒否と同義であり、若いうちの出家を願ったことだったが、結局それを押し通すことはなかった。一方にそういう厳しい生き方を想定した上で、心ならずも拒否しきれなかったとする薫の矛盾を孕んだ人物造形に、作者の表そうとする薫の特殊性を押えておく必要がある。

「匂宮」巻では、次世代の主人公二人が紹介され、六条院の主は夕霧というように源氏一族のその後が語られ、次の「紅梅」「竹河」巻は、頭中将の子孫の物語となっている。紅梅大納言の娘たちへの恋は匂宮に焦点が当てられ、「竹河」での玉璧の娘たちへの求婚譚では、薫はその中の一人に過ぎない。ここには、「匂宮」巻に見られた薫の出生の秘密に関わることは一切触れられない。これらのことから巻の成立順序を云々する論があるが、別系統の話であるという前口上まで置かれているのだから、短編物語として読み置くべきなのだ。「紅梅」「竹河」両巻には、「大君・中君」をめぐる求婚や薄幸な宮の結婚拒否など、宇治十帖に繋がる萌芽を認めることは出来るが、所詮従来通りの都での求婚譚では新味を見出だせない。匂宮はともかく厭世的な薫を、これらの場で活かせる物語は創り得ないと認識していくのが「紅梅」「竹河」の試行であり、これはこれとして継続性のない短編のまま打ち切られたのであろう。少年にして仏教を志向する、罪の子薫を受け入れる舞台が模索され、不遇の親王八宮で始められる「橋姫」巻が、全く新しい長編物語としてスタートを切ったのだ。

二、俗聖の親王との「法友」三年

宇治山の阿闍梨が京にもたらした八宮の噂は、冷泉院や薫の知るところとなる。

〔冷泉院〕「俗聖」とか、この若き人々のつけたなる、あはれなることなり」などのたまはず。

〔薫〕俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに、と耳とどめて聞きたまふ。(五—128)

冷泉院は、弟にあたる八宮が宇治に落ち延びて聖のように暮していると感じて、感に堪えない。娘たちを案じて出家もできないなら、その娘たちの後見役になつてもよいと関心を示す。若い薫の方がかえって、その老親王の「俗ながら聖」の心構えとはどんなものか知りたい、俗体のまま聖のように暮すという親王に仏の道を学びたい、と身を乗り出す。

冷泉院のセリフの中に、院の若い人達が名付けているという「俗聖」の語があるが、これは『源氏物語』ではここ一例だけであり、同時代では『赤染衛門集』四一八番歌の詞書に「俗ひしりの堂」とあるぐらいで、耳なれない用語だ。在家のままでも仏法に帰依し戒を受けた男性を「優婆塞」(女性「優婆夷」)と呼ぶ、それと同義と考えていい。それなら「夕顔」巻でも、隣の家に住む御岳精進に備える老人が「優婆塞」と呼ばれていた(一—158)し、八宮も他のところで「優婆塞ながら行ふ」(五—133)とも表現されている。それが普通の言い方であろうが、梵語の音写で漢文系の語である「優婆塞」では仮名文に

馴染まないとした造語と理解できる。敢えて「俗聖」と呼ぶのは、俗体ながら聖のように暮す親王の「俗」と「聖」の両義性を強調するためであろう。薫が惹きつけられたのは、その俗と聖の両者を生きる親王の生き方だったのだ。

在家の仏教徒である「優婆塞」「優婆夷」が、念仏読経に努めて立派な臨終を迎えた話は、慶滋保胤(？—1002)の編んだ『日本往生極楽記』に何例も挙げられている。あるいは賀茂の大斎院と呼ばれた選子内親王(九六四—1035)は、仏教から遠ざけられている斎王という特殊な立場であつたが、それゆえに、在家のままでも心を仏の教えに寄せる尊さを述べている。選子は心中に秘めた道心を釈教歌で表し、後に編んだ『発心和歌集』(1012年)の序文で「教主の懇なる誓願の誠は何ぞ必ずしも剃髪して山林に入り、生を経る讃歎の徳のみならんや」と記している。必ずしも形式的に出家して、事々しく仏陀の徳を讃える必要はないと言うのだ。それは心の問題であり、許される限度での信仰の持続は出家しなくても可能だと言うのであろう。そうした俗ながら聖の生き方を、光源氏の末の弟が送っていると聞いて、薫は関心を示さずにはいられない。

薫が八宮と「法の友」の関係を結ぶようになった理由として、その僧侶観が披歴されている。いかにも聖人めいた修行僧や学問のある法師は堅苦しくて近づき難い。高德の僧都・僧正では大げさ過ぎるし、身分低い仏弟子では人品が劣っていてむさ苦しい感じがする。それに比べると、高貴な人が身近な例えで説く仏法は、説得力があつて親しみもわく。ここで僧都や阿闍梨のような官僧が敬遠されているように、概して『源氏物語』で

は教団の中央にいる高德の僧より、「聖」と呼ばれる、例えば「若紫」巻の「北山の聖」のような權威から遠い僧が尊敬されている。宇治十帖でも、立派な僧職者でありながら、本山から離れて修行する「宇治山の阿闍梨」や「横川の僧都」に重要な役割が与えられているのだ。

薫の求める導師は、仏教一辺倒ではない身分ある在家の仏教者ということになる。しかも八宮のここにまで至った人生を知らばこそ、会って話をしたいと慕うようになる。一方の八宮は、光源氏の息子である若者がなぜ仏の道を求めるのか、その内の契機を知る由もないので、若いのに奇特だと褒め、互いを尊敬しあう親交関係が三年ほども続いたという（五—135）。ここに「法の友」であるという以外、中身の描かれることのない三年という時間を経過させるのは何故なのか。世を厭う男同志の「法友」関係の延長線上に、その娘との恋を書こうとしている作者は、いきなりそこへは入らない。薫の宇治での恋は、少年の日には元服さえ物憂がり、女には背を向けて生きてきた若者が、仏法を求めて通った真摯な三年を前提として、その上で心揺さぶられる体験として訪れるのだ。光源氏の物語とは違う新しい恋物語の創始に、作者は心を配っている。

三、大君に引き継がれた「法友」との対話

宇治に通い出して三年目の晩秋、薫は月下に合奏する琴の音に引きつけられて、姫君たちを垣間見ることになる。一人は琵琶を、もう一人は箏の琴を前にして、機知ある会話を交す姉妹

の優雅なこと。可憐で美しいのが妹で、嗜みがあつて思慮深く見えるのが姉であろうと判るように書かれている。こうした姉妹を、単なる「女はらから」ではなく別々の個性として描き分けることは、宇治十帖に至って初めてなされたことだ。ここで薫は、昔物語ながらの光景に遭遇し、予想に反して雅びな姉妹を目の当たりにして感動する。

げにあはれるものの限ありぬべき世なりけりと心移りぬべし。（五—140）

これほどまでに心打たれることが現実にはあり得たのだ、と認識を改める、その薫を語り手は「心移りぬべし」と評している。姫君に心惹きつけられていくのも当然の雲行きだろうと、物語は新たな展開を予告的に示すのだ。

偶然の垣間見は、八宮が阿闍梨の寺へ行っていた留守中ゆえに成立したのであったが、薫の大君との対話も、八宮不在によって初めて成り立つ類のことだ。大君は当惑しながらも父親の代役を務める。身分ある未婚の男女が、御簾だけを隔てて対面し、女房を介さずに直接対話するなど異例なことであり、普通の恋物語なら、垣間見の後は歌の贈答へと進むのが常套で、対話などはずっと後のことであり、記すに足りない。であるから、ここは男と女としてではなく、客人と留守を守る家刀自との対話としてある。薫の方は、八宮の娘なら何もかも見透かしておいでだろう、そういう話し相手がほしいと交誼を求める。初めての出会いから、すぐ直接の対話が交される、異例な男女の物語が始まった。その始めのセリフに、薫がその後一貫して口にする基本姿勢は示されている。

「世の常のすぎずきしき筋には思しめし放つべくや。(略) つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も聞こえさせどこに頼みきこえさせ、また、かく世離れて眺めさせたまふらん御心の紛らはしには、さしもおどろかせたまふばかり聞こえ馴れれば、いかに思ふさまにはべらむ」(五—143)

私を世間並みの好き好きしい男とは思わないでほしい。ただつれづれに暮す私の話を聞いてほしい、こちらからは世離れて暮すあなたの物思いを慰めることが出来たらどんなに嬉しいか。それぞれに背負うものを持った二人だから、きつと共感し合えるはずで、そういう話し相手になってほしいという提案である。

その同じ明け方に、もうひとつの決定的な出会いがある。老女房の弁が柏木の乳母子だったと名告り、柏木が臨終の際に漏らした遺言を遺児に伝える機会を待っていたと言うのだ。詳しい昔語りは次の機会にも分けられ、遺品も受け取ることになるのだが、薫にとつての重大事が二つ、大君との出会いと実父を知る人からの真相の提供と、それが同時に始まる物語構造になっている。この日を境に、薫の宇治に通う必然性が、八宮以外に加わったことになる。少年時代から「はじめもはても知らぬわが身」(五—24)を思い悩み、親を知らず孝養も果たせぬ罪を背負ってきた薫は、弁との対面がなかったら「罪重き身」のまま終るところだった(五—163)、とほつとする。新全集本の頭注は「漠然としていた出生への懷疑がここで明らかとなり、薫の道心はいよいよ深まる」(五—166)とするが、むしろ逆であろう。父母の罪を引き継ぐ運命を自覚はするが、父を

知らぬ罪からは解放されて出家願望の切迫感からも遠ざかり、薫の道心は徐々に薄まっていこうに形象される。そして宇治訪問の目的も八宮から大君へと移行し、そればかりか秘事漏洩の口封じという要素まで加わり、これは求道の精神からはほど遠い。

夜明けを迎え、別れる段になつてはじめて二人は歌を交すが、それも挨拶の歌で恋の贈答歌ではない。その時薫は、網代で水魚を獲る騒々しさと、水上に浮かぶ柴舟にささやかな世過ぎの営みを見ている。宇治の風趣とされる網代や柴舟にわびしい生業を見、誰しも同じ無常の世の姿、と感ずるのが薫独特の感性である。

誰も思へば同じことなる世の常なさなり。我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かはと思ひつづけらる。(五—149)

水上生活者に比して、自分だけが華やかな玉殿で安穩に暮す身の上と思つてよいものか。こうした共感が大君への歌にも反映され、その境遇へのいたわりと、孤独な心を交し合った贈答歌になっている。ただこの歌は、大君を「橋姫」に重ねたことで、はからずも恋歌仕立てとなった。古今集の歌などから、宇治橋を守る女神である「橋姫」は「人待つ女」でもあるという共通認識があるからだ。引歌による方法は、この後「総角」巻冒頭で催馬楽を引用する場合もそうだが、会話を交すのとは違う位相で状況を進める役割を果たす。八宮の宇治が「橋姫」の宇治へと移行する前触れでもある。

死期の近いことを感じた八宮は、それぞれに遺言を残して死

んでいくのだが、薫には娘たちの後見人になってほしいと依頼し、薫は口ごもりながら応諾する。「法友」同志の憚りから、直接「結婚」の語は口にされないが、互いに暗黙の了解はある。一方姫君たちには、軽薄な男に騙されてこの山里を離れるな、と戒める。これも結婚一般を禁じたのではなく、薫一人は例外だということを暗に示している。大君は父の遺言を結婚拒否の口実にすることはあっても、その真意を誤解していたわけではない。むしろ、相手は薫以外にあり得ぬことを痛いほど認識していたからこそ苦しむのだ。こちらには、姉妹二人が遺されているのだから。

八宮の死後、薫の示してくれる物心両面からの援助と厚意を、大君は思い知ることになる。薫は対面のたびに、胸のうちの片端なりとも伺って気持を晴らしてあげたいと申し出、大君も以前よりは心を込めて応える。その様子に接し、薫は自らの心の変化を自覚せずにはいられない。やはり心というもののは「移りぬべき世なりけり」(五―206)、恋に変わるのが男女の仲というもののなのだ。この自覚を抱きながらもなお、薫は一直線に進むことをしない。匂宮を中君に引き合わせるといふ道を作り、自らの恋も屈折的にしか言わないが、弁から、大君は妹の中君を相手にしてほしいと望んでいるようだと言えられた時は、きつぱりと「心の引く方」は姉ひとり、変更は不可能だと答えている。

「世の常になよびかなる筋にもあらずや。ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御

心の隈残らずもてなしたまはむなん、はらからなどのさやうに睦まじきほどなるもなくて、(略)疎かるまじく頼みきこゆる。」(五―230)

相変らず、私は好色心から言うのではないと断り、物を隔てずに無常の世の物語を心の隔てなく語り合いたいと訴える。身寄りの心細い自分としては、兄弟のように睦まじい間柄として親身に私の話を聞いてくれる人がほしい。その相手は大君以外にはあり得ないのだ。この論法は、その後薫が大君の寝所へ屏風を押し開けて入った時にも繰り返される。心を割って話したから屏風などの隔ては邪魔だという薫に対して、大君は心の隔てなく話したいと言っていたはずで、こうして入って来るのとは違うとたしなめる。この「隔てなき」の語の応酬が、二人の考えを際立たせていくのだが、この語の解釈にずれを指摘し、対話の不成立をいう論は多い。はたして対話は成り立っていないのか。

むしろ「隔て」をめぐる対話は噛み合い過ぎていて、それが贈答歌の方式に倣ったものと指摘したのは鈴木日出男氏である。「男の懸想と女の切り返しの方式」が活かされ、言葉の応酬自体は成立するが心の実際からは遠い、と論述されている。これほど息の合った二人だが、心は噛み合っていないと見るのか。薫はこの期に及んでも「御心破らじ」と大君を尊重し、自然に気持の和らぐ時を待つと言って、長い夜を「常なき世の御物語」を交して過ごしている(五―234-7)。そこには、世の無常を語り合う「法友」として、また心の鬱屈を出し合う「はらから」としての心の共有を見て差し支えないのではないか。男と

「法友」の恋

女で交す長い会話文と、口には出さない心内語も加えて、ひと夜が写し取られるという、未だ嘗てためしのない仮名文が創り出された、その画期性をこそこうした場面に認めていいように思う。

四、「法友」の恋の行き止まり

男女で「法友」のように生きる道はあるか、作者はそれを追求しているかに見える。薫と大君が仮初めの添い臥しに終った翌朝も、暁の光景を一緒に見ながら薫は、ただこのように同じ心で「はかなき世のありさま」を語り合う夜を過ごすのでよいと言っている。そして次のように提案する。

「人はいかが推しはかり聞こゆべき。例のやうになだらかにもてなさせたまひて、ただ世に違ひたることにて、今より後も、ただ、かやうにしなさせたまひてよ。」(五—23)

8)

人はどう勘ぐるか知らないが、表向きは普通の夫婦のように振る舞って、ただ世間とは違う清い間柄として今後も逢つてほしい、というものだ。誰が見ても共寝の後の後朝の場面^{ごあすけ}で、実は世間を欺いている二人だけの世界が形象されている。これは一種の共犯関係なのだ。「法友」の夫婦というのは矛盾だが、往生伝や仏教説話にそうした伝承がないわけではない。

慶滋保胤によって九八五年に編まれた『日本往生極楽記』には、優婆塞・優婆夷が十一名挙げられているが、その中に道心深い女弟子がいる(三十七話)。三十歳を過ぎてから伴氏の妻

となったが、「^{ゆかりし}牀第を同じくせざりけり」とある。臨終の時に悔いた自らの罪(汚いことをさせてきた召使女に一軒の家を与えたい等々)を夫は聞いて、妻の申し出をすぐに叶えてやったところ、立派な最期を迎えたという。契り深い夫婦であったが、同衾しなかった例である。もう一例は、高野のあたりの老法師の話だが、恥を忍んで弟子に「夜のとき」を探して欲しいと頼み、妻帯して六年を過ごしてから入滅したという。後からの妻の報告によると、「例のめをとこの様なる事なし」ということだった。夜は床を並べて「生死のいとはしき様」などを語ってくれたという。敢えて妻帯という罪を抱えこみ、「法友」となった妻と念仏を励んだ⁸⁾。老聖の話である。悪事を犯したと偽って罪を背負う信仰とは何なのか、益田勝実の「偽悪の伝統」はそれを問うている。ここでは、信仰ゆえに「法友」の関係で生きた夫婦の伝承の存在を知るに留めておく。

薫と大君の場合は、契り交さないのであるがやむを得ない今の姿と見るのが薫で、大君の心が解けたら自然に「結婚」すればよいと考えていた。しかし、そんななくずしの「結婚」は宮家の長女である大君には受け入れ難い。後見人に介添えされる正式なものでなくとも、せめて姉が世話役を引き受けたら、妹を結婚させることは可能かも知れない。薫との結婚は妹に譲って、自分は「法友」の関係を保てないものか。

「同じことに思ひなしたまへかし。身を分けたる、心の中はみな譲りて、見たてまつらむ心地なむすべき。」(五—248)

これは大君が弁を介して薫に伝えたセリフである。妹の中君

を私と同じに考えてほしい、身は二つながら心はすべて妹に預けて、ふたり一緒に薫とお逢いする気持だ。私の薫への想いはすべて妹の身に封じ込める形で、二人が結婚してくれて私が世話役に回るのが一番いい三人の関係だという考えだ。やっと導き出した妙案のつもりだが、薫には受け入れられない。自分の想い人は大君以外にはなく、中君には匂宮と逢わせる計画を既に進めているのだから。

大君の結婚拒否は、光源氏が相手にした人妻や禁域の人などの拒否とは全く違う。本来、都の公達の申し出に対して没落皇族の娘が断る理由など何もない。しかし物語は、大君の拒否を通す理屈を丁寧書き示す。皇統のプライドもさることながら、大君には薫や匂宮の背後にある都の論理が見えているのだ。匂宮が初瀬詣や紅葉狩によって見せつける栄華を、素通りされて思い知るのではなく、大君には予め分かっていたとする。匂宮からの情の勝った手紙が宇治に届けば「ただかかる山伏だちで過ぐしてむ」(五—196)と強く拒絶し、山伏のように宇治に引き籠ろうと決意していた。身の程に苦しむくらいなら、始めから関わりたくない。大君の想像力は、屈辱を先取りするだけでなく、身の衰えも先取りする。さだ過ぎた女房たちに、自らの未来を見て、

「常よりもわが面影に恥づるころなれば、疎ましと見たまひてむもさすがに苦しきは、いかなるにか」と、ほのかにうち笑ひたまへる。(五—289)

と、伊勢の歌を引用して己の容貌の衰えを恥じ、きつと疎ましくなるでしょうと薫に語りかけている。嫌われていいのにそれ

を恐れるのは変ですけど、と自らの心の矛盾を自覚してはにかんでもいい。大君は次第に、女心を正直に吐露していく。しかも、相手ばかりでなく私の気持もいずれ変わるかも知れないと言う。今は愛しく思い合っている、[我も人も見おとさず、心違はでやみにしがな]というのは、お互いに幻滅するぐらいなら今のままがいいという結論である。結婚はせず、今の「法友」の域を越えない関係を保ちたいと言うのだ。

特異な二人ゆえに保たれていたバランスが崩れるのは、薫が強引に匂宮と中君を結婚させ、女房たちが一丸となって画策したことによる。大君は、善かれと思つて描いた自らの設計図が破綻して以来、生きる意欲を失う。次第に物を食べない、果物さえ口にしない、薬湯も飲まないと記されるのは、大君の衰弱が自死の決意に発する病であることを読者に知らせる。宇治十帖での自死は、浮舟が初めてではないのだ。

いかで亡せなむ、(略)もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をかたみに見はつべきわざなれ(五—323)

これは大君の心内語である。何とか死んでしまいたい。もう世間では夫婦と見ているのだから、後戻りは出来ない。きつと互いに幻滅したり裏切ったりすることになるだろう。もし生き留まつたら出家するしかない。それなら互いに変らぬ心を保ち続けることが出来るかも知れない。これは今の幸せをそのまま凍結したいという意味でもある。重態に陥ってから、駆けつけた薫に対して発したセリフは、このまま会えずに死んでしまうのかと心細かったというものだ。死んだ後で強情な女だったと

思い出されたくない、とも言う。大君は死を目前にして初めて、薫の穏やかな人柄に感謝しつつ身を任せている。

京が十一月の五節で賑わっている頃、薫は宇治に逗留し続けて看病していたが、とうとう豊明の節会とよあかりの夜、大君は臨終を迎える。二人の最後の対話は、次のようなものだ。

（大君）「思ひ限なきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこへたまへとほめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおぼえはべる」

（薫）「ことざまにこの世を思ひかかづらふ方のはべらざりつれば、御おもむけにしたがひきこえずなりにし。今なむ悔しく心苦しうもおぼゆる」（五—327）

情け知らずの女と取られるのは切ないと、大君は重ねて言う。妹を私と同じように思つてほしいと願つたのに叶えてくれなかった、そのことだけが恨めしいと、苦しい息の下でも凜として真情を伝えている。一方の薫は、この世で心を寄せる人はあなただけになつたのだから意向に背くことになつてしまった、でも今になつては悔やまれるとも述べる。こうした臨終の場で、愛し合う男女が本音をきちんと語り合うなど、光源氏の物語にはなかつたことである。大君は辞世の歌なども詠まない。あくまでも対等に言葉を交し合う、それが薫・大君物語の特徴と言える。ついに「ものの枯れゆくやうに」消え果ててしまった（五—328）という最期も、『源氏物語』の描く死の季節としては異例である。草木の消滅する冬に、大君の一生も枯れ果てた

とする。しかも京は豊穰を祝う節会の五節舞いの夜に、寂しい山里でひっそりと息絶えたと鮮やかな対比で描かれる。ここに精一杯に生きた大君の生涯は完結するが、それを看取った薫の想いと後悔とは、どこまでも果てなく続くことになるのだ。

宇治の物語は、薫という厭世的な若者を受け入れる舞台に、俗と聖のあわいを生きた親王を据えて出発した。「法友」の交わりは大君に引き継がれ、恋を抱えこむことによつて、物語は内へ内へと延びる竹のように苦しいものとなる。作者は、憂愁を背負う男女の「世の常ならぬ」恋物語を目論んだのだが、「法友」としてしか結べない関係は、大君にとつては死を前提として完成させることが出来ても、薫に救いは与えられない。「宇治十帖」はこの先、矛盾と後悔を抱えて彷徨う薫と、救済を願う女たちに引き継がれていく。

作者は舞台を京から宇治に移して若い男女の「法友」の恋を描いたのだが、互いの苦しい胸の内を大量の会話文の応酬で、或いは声にはならない心内語を重ねることで紡いだ。仮名による散文が、心の葛藤や矛盾にまで手の届く領域を切り拓いたことに、薫・大君物語の達成がある。そして、光源氏の生涯を書き終えた後になお、青春の苦さを強調した物語を書き継いだ、作者の衰えぬ創作魂に驚嘆せずにはいられない。

注

（1）高橋亨「宇治物語時空論」（『国語と国文学』一九七四年二月、『源氏物語の対位法』所収）

(2) 益田勝実の「心の極北―尋ねびと皇子・童子のこと―」(『火山列島の思想』一九六八年)、『益田勝実の仕事2』所収は、

天皇の皇子の中にまで成人儀礼を拒否して終生を童形のまま
で生きた人生があったことを突き止めた論じたもので、宇治十
帖の薫の、結局は貫けない元服拒否は本旨ではない。

(3) 丸山キヨ子は「源氏物語における「ひじり」について」で、

もう一例「三州俗聖起請十二箇条事」を挙げている(『源氏
物語の仏教』一九八五年)。これは堀一郎論文からの引用で、
民間の「俗聖」的信仰を重視する堀一郎は、「俗聖」という
表現の初期の用例を「橋姫」巻から解き明かしている(『我
が国民間信仰史の研究』(二) 宗教史編 一九五三年)。

(4) これは漢文の序であるので、石原清志『発心和歌集の研究』
(一九八三年)の訓読文を記した。

(5) 鈴木日出男「薫における道心と執心」(『岩波新大系』『源氏物
語4』解説 一九九六年)、「薫と大君」(『源氏物語虚構論』
二〇〇三年)など。

(6) 同話が、『今昔物語集』(巻十五―第四十八)では「同ジ床ニ
不臥スシテ触バヒ近付ク事無シ」とある。

(7) 『発心集』第一―十一「高野の辺の上人、偽つて妻女を儲く
る事」

(8) 益田勝実「偽悪の伝統」(『文学』一九六四年一月号)、『益田
勝実の仕事2』所収)に男女の「法友」の指摘がある。偽悪
者を装うという自己克服の営みを伝える説話の根拠地として、
「別所」が考察された論である。

(9) 伊勢の「夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に耽づる

身なれば」(古今和歌集681)からの引歌。

※ 『源氏物語』本文の引用は新編日本古典文学全集(小学館)に
より、巻数と頁数を示した。

(あまの きよこ・本学元教授)